ワイルドのジャーナリズムに対する アンビヴァレンス

玉井　暲

オスカー・ワイルドのそう長くない文学的生活のなかで、1880年代の後半はジャーナリストとしての時代であったと言えるであろう。それは、1887年11月号から1889年10月号まで、月刊誌 *The Woman's World* の編集長を務めたという経歴に集約的に表象されているからであるが、ワイルドは、しかし、この自分の雑誌以外に、50誌以上の多くに雑誌にさまざまなエッセイや書評を寄稿していた。たとえば、ワイルドのジャーナリズム記事を編集した Anya Clayworth によると、*Pall Mall Gazette* には70篇以上の書評を載せているし、*The Dramatic Review* には8篇の書評を、*The Court and Society Review* には少なくとも4篇のエッセイを載せている。つまり、ワイルドは、その80年代の後半はジャーナリズムの世界に深く関わっていたのであった。

ワイルドが雑誌に掲載したのは、書評だけに限らない、後年、書物の形に収録されるワイルドの主要な批評エッセイの多くは、この時代に発表されている。たとえば、'The Truth of Masks'（元のタイトルは、'Shakespeare and Stage Costume'）は *The Nineteenth Century* (1885)に、'Pen, Pencil and Poison'は *The Fortnightly Review* (1889)に、'The Decay of Lying'は *The Nineteenth Century* (1889)に、'The Critic as Artist'（元のタイトルは、'The True Function and Value of Criticism'）は *The Nineteenth Century* (1890)に、それぞれ発表されており、その後に *Intentions* (1891)にまとめられることになる。短篇小説もまた80年代後半に、まず最初に雑誌に掲載されたものである。'Lord Arthur Savile's Crime'は *The Court and Society Review* (1887)に、'The Portrait of Mr. W.H.'は *Blackwood's Edinburgh Magazine* (1889)に、それぞれ発表されている。そして、唯一の長編小説 *The Picture of Dorian Gray* も、最初は雑誌に発表されたことは言うまでもない（*Lippincott's Monthly Magazine*, [1890]）。

ワイルドの経歴を調べてみると、80年代はこのようにジャーナリズムに深く関わり、そのなかで文学者としての修行時代を送り、90年代に入って注目の作家として大ブレイクする才能を磨き実力を蓄えたと想像できるにもかかわらず、ワイルドの主要な批評エッセイから浮かび上がる姿は、このジャーナリズムに向かって敵対する姿勢である。それは、たとえば'The Critic as Artist — Part I'において際立って明らかになる。ワイルドの代弁者と見られる登場人物ギルバートは相棒のアーネストにこのように発言している——

> ギルバート：僕は現代のジャーナリズムを弁護しようとは思わない。これは最も下品なものが生存競争に勝つという、ダーウィンが発見した偉大な法則によって充分にその地位を保証されている。僕は文学だけを問題にしたいのだ。
> アーネスト：文学とジャーナリズムはどう違うのだ。
> ギルバート：ジャーナリズムというものは読むに堪えないし、文学は今日では読まれていない。それだけの違いなのだ。

また、アメリカのジャーナリズムを例に挙げ、ワイルドは揶揄を続けている——

> 事実、われわれはギリシアの批評精神にすべてを負っているのであって、そうでないのは、ソネット。……それにアメリカのジャーナリズム、これはまったく独特なものだ……。

ワイルドのこうしたジャーナリズム批判が最高潮に達するのは、「社会主義下の人間の魂」（1891）であろう。まず、現代におけるジャーナリズムの肥大化を嘆くことから始める——

> 昔は拷問があった。今は新聞がある。……誰かがジャーナリズムを第四階級と呼んだ。……しかし今日ただいまはそれが実は唯一の階級なのである。ほかの三つを食いつくしてしまった。……われわれはジャーナリズムに支配されているのだ。アメリカでは大統領は四年間君臨するが、ジャーナリズムは永遠に統治する。

では、イギリスではどうなっているのだろうか。ワイルドは、ジャーナリズムが、プライヴァシーの世界に聞き耳を立てる一般庶民の歪んだ好奇心を掻き立てることに加担していると、鋭く批判する——

> ジャーナリズムは、イギリスではいまなお大きな要因、真に注目すべき権力である。それが、人間の私生活に対して加えようとする圧制はまったく異常なものがあると思われる。＜実をいえば、民衆は、知るに価することを除いて、あらゆることを知ろうとする飽くなき好奇心を持っている＞。ジャーナリズムは、このことを知っており、小売商人のような習慣を持っているので、民衆の要求を満たしてやる。

これとは反対に、フランスのジャーナリズムをめぐる状況には、ワイルドは好意的である。両国におけるこの対照性を踏まえて、スキャンダルを追い求めるイギリスの社会に対する批判を強めていく——

> フランスでは、事実ジャーナリストに制限を加え、芸術家にほとんど完全な自由を許している。しかし、＜このイギリスでは、ジャーナリストに絶対の自由を与え、全面的に芸術家に制限を加えているのである＞。すなわちイギリスの世論は、事実上美しいものを作る人間を束縛し妨害し歪曲しようとし、ジャーナリストを強制して、実際上醜悪な、または胸のむかつくような、または不快きわまるものを小売させている。そのため世界中にまじめこの上ないジャーナリストと無作法この上ない新聞が存在するわけである。

ワイルドは、このように90年代に入るとイギリスのジャーナリズム批判を表面に強く打ち出してくるのである。

ジャーナリズムに対する批判的姿勢は、当時、ワイルド一人がもっていたものではない。たとえば、マシュー・アーノルドは、80年代の後半、この批判性を明らかにしていた。ワイルドが半ば専属の寄稿家として多くの書評を載せていた *Pall Mall Gazette* に代表されるような「新ジャーナリズム（a new journalism）」が台頭してきた現象を苦々しく思ったアーノルドは、このような批判的エッセイを、1887年5月（*The Nineteenth Century*）に発表したのである——

> この新ジャーナリズムは、可能性、新しさ、多様性、感動、共感、寛容性

をもっている。しかしその大きな欠点は、それは頭が空っぽだということである。それは、数々の主張を、真実であることを願っているがゆえに大胆に行なう。しかしそれらが誤っていても、絶対にそれを訂正したりはしない。ものごとを実際あるがままに見てそこに辿りつこうとすることなどは、まったく関心外である。つまり、今の民主主義は、生命力、運動力、共感、善良性などをもっていながら、このジャーナリズムと同じように、頭が空っぽである傾向があるのだ。

Matthew Arnold, 'Up to Easter,' p. 202.

イギリスの十九世紀末はジャーナリズムの時代であった。ジョン・ストークスが明らかにしているところによると（p. 17）、80年代の初頭には、*The Times* などの朝刊紙、*Pall Mall Gazette* などの夕刊紙、*Evening News* などの新刊紙、*The Nineteenth Century* などの月刊誌・季刊誌、*Saturday Review* などの週刊誌、*Illustrated London News* などの挿絵付き雑誌など、多種多様のジャーナルが発刊されていたという。こうしたジャーナリズム全盛のなかで、マシュー・アーノルドは、この「新ジャーナリズム」を「頭が空っぽである（feather-brained）」と批判したのだった。

したがって、ワイルドがジャーナリズム批判を展開する根拠もそれなりに存在しているにちがいない。ワイルド自身が、*The Woman's World* の編集長を務めたという事実は、ワイルド研究において極めて興味深い点で、新しい問題性を孕んだ局面だと言えよう。

ワイルドの80年代から90年代にかけての文学者としての活動を総体として見れば、ワイルドにはジャーナリズムに対して愛憎半ばするアンビヴァレントな姿勢が窺えると判断できるのではあるまいか。ジャーナリズムに接近しつつ、反発を示すという、ワイルドのこのアンビヴァレンスは、どんな文学的意味をもっているのだろか。ジャーナリズムの世界に身を置きながら、スキャンダルを嗅ぎつけてくる「大衆の下劣な欲望」を実感していたワイルドには、二十世紀に入って大きな問題となる「大衆」がおびる権力性への警戒あるいは恐れにも似たものが潜在しているようにも思われる。

今回のシンポジウム「ワイルドとジャーナリズム」において、従来のワイルド研究からは盲点となっていたと思われる側面からワイルド文学のもつ問題性に迫ってみた。お願いした3人の講師のうち、角田信恵氏には「*The Woman's World* をめぐるジェンダー・ポリティックス」について、梅津義宣氏には「*The Woman's World* 編集経験がワイルドに与えた<付加価値>」について、金田仁秀氏には「ワイルドとジャーナリズム——ゲイ批評の視点から」について、それぞれお話をしていただいた。

引用文献

Arnold Matthew, 'Up to Easter.' in *The Last Word*, ed., R. H. Super. Ann Arbor: U of Michigan P, 1977.

Brake, Laurel, *Subjugated Knowledges*. London: Macmillan, 1994.

Clayworth, Anya. *Oscar Wilde: Selected Journalism*. 'Oxford World's Classics.' Oxford: Oxford UP, 2004.

———. '*The Woman's World*: Oscar Wilde as Editor.' *Victorian Periodicals Review*, 30 (1997), 84-101.

Green, Stephanie, 'Oscar Wilde's *The Woman's World*.' *Victorian Periodicals Review*, 30 (1997), 102-18.

Stokes, John, *In the Nineties*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1989.

Turner, Mark W., 'Wilde and the Magazines: A Dialogue.' 『オスカー・ワイルド研究』第8号（2007）、13-29.

玉井暲「ワイルド編集による *The Woman's World* の復刻に当たって」、『別冊解説：*The Woman's World*』. 東京：アティーナ・プレス、2008.1-6.

玉井暲・角田信恵共編集、『*The Woman's World* — November 1887-October 1889』, 2 vols. 東京：アティーナ・プレス.